

ランチオンセミナー9

女性ホルモンと手指症状

2026年

4月10日(金)

12:00~13:00

会場:第1会場

ホテルニューオータニ博多

3F 芙蓉の間 雅



座長

下江 隆司 先生

(和歌山県立医科大学 整形外科学講座 講師)



「女性のための手外科外来」の現況と
手指の関節痛の病態をめぐる考察

多田 薫 先生

(金沢大学医薬保健学域保健学類 作業療法学専攻 教授)



乳癌術後ホルモン療法と骨・関節マネジメント
— エビデンスから実臨床へ

阪口 晃一 先生

(京都府立医科大学大学院 医学研究科 内分泌・乳腺外科学 准教授)

■認定単位 日本手外科学会1単位
日本整形外科学会 1単位 分野[04]代謝性骨疾患(骨粗鬆症を含む)または[10]手関節・手疾患(外傷を含む)
※取得単位につきましては、今後変更となる可能性がありますので、あらかじめご了承ください。

ランチオンセミナー9

日時:2026年4月10日(金) 12:00~13:00

座長: 下江 隆司 先生 (和歌山県立医科大学 整形外科学講座 講師)

■「女性のための手外科外来」の現況と手指の関節痛の病態をめぐる考察

演者: 多田 薫 先生

(金沢大学医薬保健学域保健学類 作業療法学専攻 教授)

2022年に日本手外科学会は、更年期女性にみられる関節痛やこわばりなどの手指の不調、Hand OAや腱鞘炎などの手指の疾患を包括する概念として「メノポハンド」を提唱し、啓発活動を展開している。そのような背景から2024年に当院は、メノポハンドに悩む患者さんの診療窓口として「女性のための手外科外来」を開設した。本外来では従来の生活指導や装具療法に加え、漢方薬や女性ホルモン製剤の処方、サプリメントの摂取指導などを行っている。

これまでに本外来を受診された患者さんの愁訴で最多だったのは手指の関節痛だが、手指の関節痛に関しては、患者さんが望む「発症を予防する方法」や「進行を抑制する方法」を十分に提示できていない点が課題だと感じてきた。そこで私たちは手指の関節痛の病態の一端を明らかにすることを目的に、高解像度CTを用いた画像解析やバイオメカニクスに関する研究を行っている。高解像度CTを用いた画像解析では、ヘバーデン/ブシャール結節例においては側副靭帯付着部の陥没変形や局所のHU値の低下など、構造的な脆弱性が生じていることが判明している。またバイオメカニクスに関する研究では、母指CM関節症例においては掌側関節面に応力が集中しており、同部での関節裂隙の狭小化や中手骨の掌側関節面を中心とした摩耗が生じていることが判明している。講演では「女性のための手外科外来」の現況や治療成績について紹介するとともに、研究結果を元に私たちが取り組んでいるヘバーデン/ブシャール結節に対する保存療法や母指CM関節症に対する手術療法について紹介する。

■ 乳癌術後ホルモン療法と骨・関節マネジメント —エビデンスから実臨床へ

演者: 阪口 晃一 先生

(京都府立医科大学大学院 医学研究科 内分泌・乳腺外科学 准教授)

近年、乳癌は増加傾向にあり、日本人女性の9人に1人が乳癌に罹患する時代となっている。乳癌の治療成績は向上しているが、その要因として早期発見だけではなくホルモン療法をはじめとした薬物治療の進歩がこれに寄与している。整形外科医・手外科医が外来で乳癌サバイバーを診る機会も増えているのではないだろうか。

乳癌患者の7割以上はホルモン感受性陽性で、最長10年の術後ホルモン療法が推奨されている。一般的に閉経後に用いられるホルモン療法であるアロマターゼ阻害剤では骨や関節に関する副作用が報告されており、整形外科的なご支援をお願いするケースも増えている。

本講では、前半は乳癌の疫学やホルモン陽性乳癌の治療について解説する。ホルモン療法の長期投与が推奨される中、安全な長期治療継続を可能にするためには予防的な対策が重要となる。後半にはアロマターゼ阻害剤の副作用である骨量低下に対して、我々の研究室で取り組んでいる骨粗鬆症対策について述べたい。また、関節痛・関節症状においては運動療法以外に有効な治療法があまりない中、大豆イソフラボンの代謝産物であるエクオールは更年期の関節症状に有効であるという報告がありセルフケアとして期待される成分である。演者はエクオールを継続的に摂取することでアロマターゼ阻害剤の副作用を乗り越えた症例を多く経験しており、辛いホルモン療法を克服するための1つの手段として積極的に取り入れている。エクオールの概要や関節症状に対するメカニズム、実際の使い方についても触れたい。

このように、整形外科・手外科の先生に、乳癌患者がどのようなコンセプトでホルモン療法を受け、副作用で困っているかを知っていただき、サバイバーの診療に携わることになった際の治療方針を決定していただくための材料になれば幸いである。